エゾシカ

Cervus nippon yesoensis

シカ科

エゾシカ（オス）

名前の由来
北海道(エゾ)に生息するシカであることから。シカについては、古く牡鹿をセカ（夫鹿）、牝鹿をメカ（女鹿）と呼んだが、セカが呼び名となり、転じてシカとなったという説がある。漢字名：蝦夷鹿

形態的特徴

頭胴長（鼻先から尻尾の付け根まで）オス190cm、メス150cm。肩高はオス130cm、メス110cm。体重はオス130～150kg、メス80kg程度。
夏毛は茶褐色の地色に白斑がある。冬毛は、オスは濃い茶色、メスは灰褐色で、白斑はほとんど消える。
尻に白いふさふさした毛が生えている。
枝分かれした角をオスのみが持つ。角は毎年春に落ち、春から初夏にかけて新しく伸び、秋に堅くなる。
類似種：なし。

エゾシカの母子。夏毛。鹿の子模様が目立つ

エゾシカのオス。冬毛。尻は白い

生息環境・分布

低地から山地の樹林。
分布：エゾシカは北海道全域にのみに生息する。ただしエゾシカはニホンジカの亜種で、ニホンジカはベトナム※から極東アジアに広く分布する。またニホンジカはエゾシカの他、ホンシュウジカ、キュウシュウジカ、ヤクシカ、ケラマジカ、ツシマジカ、マゲシカの６亜種に分けられ、日本各地に生息する。北海道内では、全域に分布。
十勝地方では、平地から山間部まで広く分布する。

※ 亜種：同じ種が地理的に隔離され、独自の分化をとげ、形態的に違いがあるもの

食性・他生物との関わり

植物食。ササやフキ、オオイタドリ、エゾノリュウキンカなどの植物の葉や茎など。樹皮なども食べる。
昔はオオカミなどに捕食されていたが、現在では弱ったものがヒグマなどに捕食される程度と思われる。大量の降雪があると動くことができずに弱って死亡する場合もあり、また狩猟や駆除によって放置死体も増え、春に雪の下から現れた死体は、冬眠明けのヒグマ、ワシやタカ、アカゲラなどのキツツキやシジュウカラなどの餌になるという。(→興味深い話の項参照)

生活サイクル

	１月	２月	３月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月
出　現　期	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
交　尾　期										―	―	
出産・育児期					―	―						

繁殖生態・寿命

交尾期は10月頃、オスジカはオス同士で角を突き合わせる（角突き）。またオスは「フィーヨー」という鳴き声（ラッティングコール）を上げ自分をアピールするという。(→興味深い話の項参照)

強いオスは数頭のメスを囲い込んで「ハーレム」をつくって交尾を行う。

出産は５～６月、１子を産む。生後２時間以内に小走りができるようになる。生後２週間で母ジカのあとをついて歩き、草なども食べるようになるが、泌乳は冬頃まで続けられるという。(→興味深い話の項参照)

２年で成熟する。寿命は野外ではオス９歳、メス15歳が最長。１歳半までに半数が死亡し、平均するとオスで３歳弱、メスで４歳弱程度になるという。

興味深い話

■エゾシカはニホンジカの亜種。ニホンジカはベトナムから極東アジアに広く分布。北海道以外にはホンシュウジカ、キュウシュウジカ、ヤクシカ、ケラマジカ、ツシマジカ、マゲシカの６亜種が生息。

■春から夏にかけてのオスの角は、成長中で袋角と呼ばれる。ビロード状の皮膚に覆われ柔らかく、毛細血管も発達しているためさわるとやや熱く感じる。

■８月末～９月になると角は成長を終わり表皮が脱落する。これを枯れ角と呼び通常は３カ所で枝分かれし、４カ所の先端を持つ。(ただし１歳では棒状、老齢では不規則形ともなる）枯れ角に変わる際、オスジカは木の幹などに角をこすりつけ、表皮の脱落を促進する。木に痕跡をつけるのも目的の一つかも知れない。

右前足

■交尾期、オス同士の角突きの際「カツーン」という乾いた音が響くこともある。時にはこの闘争で命に関わる程の傷を負うこともあり、また２頭の角がからみ合ったまま身動きがとれず、そのまま死に至ることもあるという。

■オスの「ラッティングコール」(→繁殖生態・寿命の項参照）に似た音を出す鹿笛を吹いて、近づいてくるオスジカを仕留める、というシカ猟が世界中にある。縄文時代の出土品にも鹿笛があるという。

■昔はオオカミなどに捕食されていたが、現在では弱ったものがヒグマなどに捕食される程度と思われる。大量の降雪があると動くことができずに弱って死亡する場合もあり、一時は激減したことがあるが、現在は増加した。

■生後２週間程は茂みに隠れていて、母親は１日に２～３回授乳に戻るのみであるという。迷子になっているわけではない。白斑の浮かぶ「鹿の子模様」は木漏れ日と紛らわしく、外敵から身を隠すのに役立つという。

■栄養不良で餓死した場合、最終的に骨髄の中の脂肪まで消費してしまい、死体の大腿骨を割ってみると、通常は白いワックス状の骨髄が赤いゼリー状になっていることがあるという。

■近年、狩猟の際に放置されたシカの残骸を食べたワシが鉛弾を飲み込み、鉛中毒によって死亡するなどの問題が発生した。

■現在では個体数も増加したが、法面の芝を食べる為に現れ、列車や自動車等との衝突事故が発生したり、農耕地に出没して牧草などに食害を与えているといった例もある。

■樹林で樹皮を食害することもあり、越冬地でノリウツギやニレの仲間といったシカの好む樹種が枯死する事がある。

■松浦武四郎の「東蝦夷日誌」には、遙か向こうの赤く染まった大地に案内役のアイヌが弓矢をつがえて走り出すと、実はそれが数万という単位のシカの大群衆であった、という意味の記述があるという。

右後足

■特に内陸のアイヌ民族にとってエゾシカは重要な獲物であり、野菜不足となる冬には内臓を生食することで壊血病の予防にもなり、皮も冬靴や雨具などに無駄なく使われていたという。

■アイヌ民族は角を銛などに使用した他に、粉にしてやけどの薬に、また袋角を熱冷ましに利用したという。中国では袋角を鹿茸（ろくじょう）と読んで陰干しにしたものを強壮強精薬としている。

■十勝地方のアイヌ語では「ユㇰ」という。

袋角をつけたオスのエゾシカ。夏毛

配慮事項

特になし。

参考文献

「日本の哺乳類」阿部永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明　東海大学出版会　1994

「北海道　森と海の動物たち」エコ・ネットワーク編　北海道新聞社　1997

「日本動物大百科２ 哺乳類Ⅱ」日高敏隆 監修　平凡社　1996

「動物名の由来」中村浩　東京書籍　1981

「知床の哺乳類Ⅰ」斜里町立知床博物館編　北海道新聞社　2000

「フィールドガイド 足跡図鑑」子安和弘　日経サイエンス社　1993

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館（編）、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会　2004